

全日本民医連からの要請を受けて参加しました。以前 1988 年のカナダ・モントリオール大会に参加したことがあり、今回で 2 回目です。

22 年前のモントリオール大会では、「部分核実験禁止条約（地上核実験のみを禁止）」の評価をめぐり、「核兵器廃絶に向けた第一歩である」という雰囲気があり、会議場内が紛糾しました。当時は、核兵器廃絶にはまだまだ遠いというのが実感でした。

しかし今回のバーゼル大会は、内容も充実し、非常に活気に満ちていました。第一に、「法的に拘束力のある条約をつくることを目指す」という明確な方向性を提示したことに感動しました。また各国で、①政府やリーダーシップをもつ人々に働きかけること、②市民社会の中で核兵器廃絶のための広範囲なネットワークをつくり、③マス・メディアにも積極的に働きかけようという具体的な行動提起もありました。

こうした背景には、オバマ米国大統領のプラハ演説や今年の 5 月に行われた NPT 検討会議の成果があったことは十分考えられますが、IPPNW の 30 年にわたる歴史の積み上げの成果、会員の地道な努力の賜であるという印象を強く感じました。

二つめに、今大会で初めて「反核医師の会」が中心となってワークショップ（分科会）をもつことができたことに感動しました。「核犠牲者」と題したワークショップでは、私たち代表派遣団の医師から、セミパラチンクス核実験場を中心に住民の被曝被害の状況の報告や原爆症認定問題と集団訴訟をめぐるとの問題の報告発言があり、またオーストラリアや中国などからも積極的な発言があって、交流を大いに深めることができました。

さらに三つめに、核兵器廃絶だけでなく、小火器の使用禁止をはじめ、あらゆる暴力、人権の侵害や抑圧の一掃までを掲げ、アフリカや中南米の医師たちが中心に活発に発言されていたことが印象的でした。

最後に、バーゼル大学長の「我々は知識に基づいて行動しなければならないが、決して知識の召使いにはならない。我々は学術者として社会発展に寄与しなければならない。」という開会の挨拶には、同じ科学者として強く共感するものがありました。